

社会変化における居住空間に関する研究

ー ラオスのKL村を事例として ー

Keywords

住居 信仰 寝室
祭壇 柱



K08038 鎌中 範子

1. はじめに

1.1 背景

現在の日本では、先進技術に依存した生活が当たり前
に営まれている。その中で住居に求められているのは快
適性や耐震性などイメージや数値で表現される、いわば
付加価値のようなものとも言える。かつての日本にあっ
たような縁側や土間といった空間は減ってきている。こ
のような現象は社会の変化とともに常に起きており、そ
れ故に住居は社会を反映してきたものともいえる。

こうした見方をすると、社会が変わり続ける今日、変
わり続ける人の生活と住居ではどのような取捨選択がな
されているのだろうか。

1.2 研究目的

本研究では、国内の社会、経済状況が著しい変化を遂
げているラオスで調査をおこなった。ラオスは現在、経
済成長の過程にあり、それはラオスの人々の生活様式を
変え、特に現金収入の増大は、住宅の建て替え、家電製
品やバイクの購入など生活に多大な影響を与えたと言わ
れている。

一方で、ラオスは、国民の約7割近くが信仰している
仏教の他に、宗教信仰と居住空間の関係については、精
霊祭祀、バーシーという土着の習慣が存在する。また、
既存の研究から、例えばラオスを含む東南アジアでは、
「祭壇は就寝時の頭の上に設置する」という考えや、特
別な意味をもつ柱が存在しているという事実がある。

これらをふまえた上で、本研究では、今回調査を行っ
たラオスKL村の住居について、「柱」、「祭壇」、
「寝室」の3つに焦点を絞る。これら3つは、ともに関連
しあっており、その関係性は、特に宗教的側面や居住に
関わる慣習において、顕著にみられる。本研究では、こ
のような観点から、社会経済的に変化している過中にある
現在のラオスの村落において、住居と住まい方の実態
を明らかにし、それを社会変化にからめて位置づけるこ
とを目的とする。

1.3 研究方法

2011年8月26日～9月15日の21日間、KL村で現地調査
を行った。調査内容は住居の実測と、住人へのインタビ
ューである。

(1) 実測

平面図(1/50)、屋敷図(1/200)、集落図(1/500)をそれぞ
れ実測により作製し、70軒のデータが得られた。

(2) インタビュー調査

民族や年齢などの基本的情報や、祭壇、柱などについ
てインタビューを行った。実測した住居70軒の内、65軒
のデータが得られた。

2. 調査地概要

ラオスの面積は日本の本州とほぼ同じ約23.7万km²で、
人口は562万人である。国連開発計画によれば、人口の
79.3%が農山村部に居住し、そのほとんどが農業に従事
する後発開発途上国とされる（平成23年9月現在）。

今回調査したKL村は首都ビエンチャンから200kmほど
離れており、車で3時間ほどの場所に位置している。世帯
数70軒、学校1、寺院1で人口は330人の村であった。

8割近くの構成人々が、月1回以上は村外に行くという。
59軒中52軒はバイクを所持しており、村外に行くにはそ
のバイクを使う。行く目的は、市場での食料や生活雑貨
の買い物が主で、それ以外には親戚や友人に会いに行く、
店で売るものの仕入れといった理由であった。

2.1 民族

夫婦の出身民族の違いによって子供の帰属民族に違い
がでてしまうため、各住居の夫婦のみ124人において集
計をとった。ラオ族が45%、タイ・プワンが36%、タ
イ・デーが10%、タイ・ダムが6%であった。また、
親がラオ族ではなくとも、子供をラオ族にすることがで
き、ラオ族であることがステータスになっている傾向が
あった。

2.2 住居

住居形式においては、高床式と地床式がみられ、地床
式においてはコンクリートで建てられた平屋と、高床式
の床下部分の壁をコンクリートでつくり、1階も居住空
間にした2階建ての住居が存在した。高床式46軒、地床
式のうち平屋が10軒、2階建てが14軒であった。

建築年においては、未回答を除き、全ての住居におい
て築年数は30年以内であった。そして、2007～2011年に
建てられた住居は59軒中28軒と、比較的新しい住居が多
いということがわかった。生まれた時からKL村に住んで

いるという人が多いので、何度も建て替えが行われていると考えられる。

3. 住居における共通点

3.1 棟木の方

KL村には南北に渡って大きな1本の道路が存在する。その道路に沿うように住居が配置されており、No. 19とNo. 36の2軒以外は、道路と垂直の方向に、棟木を向けて建てられていた。この2軒においても、棟木が道と垂直の住居を建設中であった。また、北に進むにつれて道路は東西の方向へ曲がっており、棟木の方向は南北の向きに傾いていた。ここから、棟木は、方角に関係なく、道路に垂直にわたしているということがわかる。

3.2 住居における寝室の位置関係

寝室は、棟木と平行な壁に沿って配置されていた。棟木の方向は東西の向きになっている住居が多いので、寝室は北か南側に設置されている住居が多かった。また、寝室の入り口は棟木と平行の壁に設置されていた。

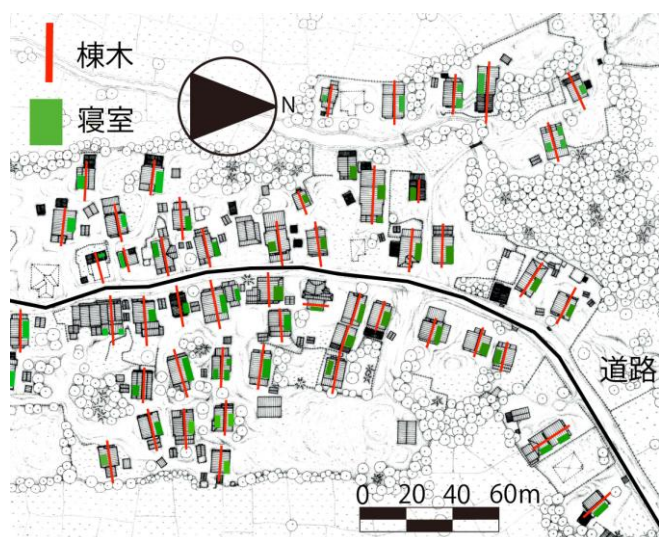


図1 道路と棟木と寝室の関係

3.3 就寝形態

全軒において、体の向きは棟木と垂直方向で、頭の向きは寝室の入り口と反対側に頭を向けていた(図2)。体の向きにおいては、亡くなった人は棟木と平行に安置されるので、生きているうちはそれと逆の向きにしなければいけないと考えられている。

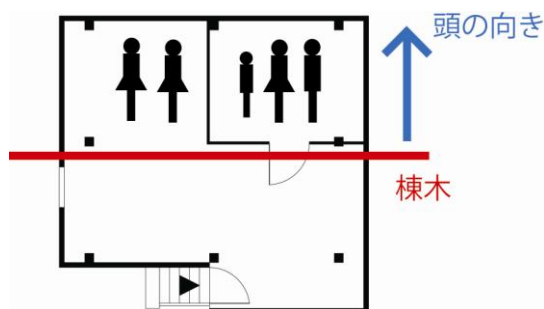


図2 就寝形態

4. 信仰

4.1 信仰宗教

表1 信仰宗教と軒数

信仰宗教	軒数
仏教のみ	51軒
仏教・アニミズム	6軒
アニミズムのみ	2軒
仏教・パム	1軒
アニミズム・パム	1軒
仏教・アニミズム・パム	1軒

KL村は仏教徒が多く、8割近くの住居で月1回以上は寺に通っていた。そして以下に述べる3つの儀礼が存在した。

(1) ワンシンの日

ワンシンの日という満月、半月、新月の日に行う仏教儀礼が存在した。ワンシンの日には慎むべきことというのがいくつかあるがその一つに建築がある。

(2) パーシー

新年、子供の誕生、結婚、親族・友人などの送別および歓迎、住居の新築、さらに病気・傷害が治癒した時などに、親族をはじめ友人、近所の人々などが集まって幸福と繁栄を祈願するパムに基づく儀式である。

(3) リエン・ピー・バーン

農業に関する祈りは、リエン(供え物をする)・ピー(神)・バーン(村)といい、雨季前の5月と収穫の終わった11月に行う。5月の方はリエン(供物)・カオ(入)といって、神に対して農業を開始する時の挨拶で、11月の方はリエン・オーク(出)といい、農業が終了したことを告げる挨拶である。

4.2 信仰に関わるもの

ここでは、研究目的で述べたように、信仰に関わるものとして、過去にラオスの伝統的な住居の特徴として述べられてきた「柱」と「祭壇」に焦点を絞る。

(1) 祭壇

KL村では、祭壇は唯一、男しか触れない。男の子供も触れず、女子供は近付くことさえできない。掃除や供え物は父系の男性が行うことになっている。祭壇がある住居は70軒中軒であった。そのうち仏教に基づく祭壇は9軒、アニミズムに基づく祭壇は5軒であった。

① 民族と祭壇の有無

祭壇がある住居に暮らす民族はタイ・プワン、タイ・ダム、タイ・デーに多くみられた。ラオ族、タイ・プワンは仏教を信仰し、タイ・ダム、タイ・デーはアニミズムを信仰すると一般的に言われている。KL村にはアニミズムを信仰している住居は10軒あったが、そのうち5軒は祭壇をもち、仏教信仰者に比べて比較的高い割合で

祭壇をもっていることがわかる。これは、アニミズムの祭壇は、息子に継承するといわれているので、受け継がれる可能性が高いからだと考えられる。残り5軒のアニミズムを信仰しているが祭壇をもたない住居は、夫婦のどちらかがラオ族で仏教を信仰している事が多かった。夫婦で民族が違い、信仰宗教も違ってくるので、祭壇を持たないのだと考えられる。



写真1 仏教の祭壇



写真2 タイ・ダムの祭壇

②寺に行く頻度と祭壇の有無

アニミズムのみを信仰する住居は寺には行かない。しかし、祭壇は必ずもっていた。アニミズムと仏教の両方を信仰している住居は寺に定期的に訪れており、祭壇を持つ住居と持たない住居がそれぞれ存在した。

③家父長の年齢と祭壇の有無

No.55の住居においては、家父長が31歳であるが、両親が死ぬまでは両親と一緒に住んでおり、祭壇に水を供えていたが、両親が死んでからはお供えをしていないという。No.48の住居は、父が亡くなる前、霊に祈りをささげる棚があった。No.56においても、2005年の父母がいた時までは祭壇があったが今はないという。また、一番大切なものは何かという質問に対して、祭壇をもつ住居では、「祭壇が一番大切である」と答えている住居が3軒あるのに対して、No.48は、「TVが一番大切」と答えている。No.56は「金」と答えている。

そこで、祭壇を持つ住居と持たない住居を、家父長の年齢ごとに調べた(図3)。家父長が亡くなっている場合には、家母長の年齢にした。

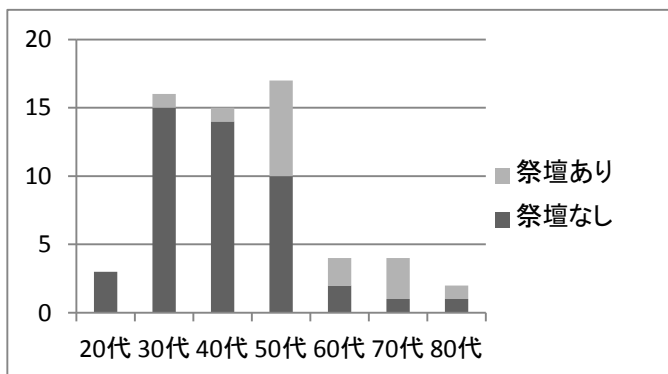


図3 年齢別に見た祭壇の有無

図3をみると、祭壇の有無に関わらず家父長は30~50代が多いということが言える。そして、年代が高くなるにつれて祭壇をもつ割合が高くなるということがわかる。

KL村において元々どの程度祭壇をもつ住居があったのかは確認できていない。しかし、祭壇が受け継がれていくアニミズムは別として、仏教における祭壇は、No.48,55,56にみられるように、世代が変わるにつれてなくなってきたのかもしれない。この原因として、大切なものをTVや金と答えているように、宗教や信仰とは別の価値観に重きを置きはじめたというのが一つの原因なのではないかと考えられる。

④建築年と祭壇の有無

建築年と祭壇の有無の関係をみたところ、新しい時期に建てられた住居でも祭壇は存在することが分かった。

(2) 柱

70軒中15軒の住居で、なんらかの意味をもつ柱が存在した。15軒中7軒においては柱、祭壇の両方もあり、そのうちの3軒に関してはその柱に祭壇が取り付けられていた。柱の意味においては、「建設時に最初に立てる」や、「一番大切な柱」としてとらえている事例が多かった。しかし、柱の名前は同じでありながら、柱の意味が異なっていた。

特別な意味をもつ柱は、仏教を信仰している住居において多くみられた。No.37においては、満月、新月の日に花2本、キャンドル2本、線香2本を供えテワダーのために祈る。No.51においては、ワンシンの前日には花2本とキャンドル2本を供え、ワンシンの日にはお粥などを供える。このように柱に仏教的な要素を絡めている事例がいくつかみられた。

その他に、柱がある住居とない住居で、民族、寺や村外に行く頻度、家父長の年齢、建築年と比較してみたが、特に目立った傾向はみられなかった。

(3) 祭壇、柱の設置場所

①祭壇の設置場所

祭壇は、就寝場所に取り付けられていることが多く、また、祭壇の下で寝る人は家父長である傾向がみられた。(図4)No.6においては、祭壇は主室にあるが、祭壇側から家父長夫婦が並び男女の順に並んで寝るというきまりが存在した。

また、就寝場所以外に取り付けられている祭壇においては、全ての住居で、寝室がある側の壁に設置されていた。

ラオスの伝統的な住居にみられたという「就寝体勢時の頭上に祭壇がとりつけられる」というきまりは全軒ではあてはまらなかったが、寝室がある側の壁に設置されるなど、寝室と祭壇の関連は少なくとも存在していた。

祭壇の場所	軒数	平面事例 (■は祭壇)
寝室	4	 No.62
主室内の就寝場所	5	 No.47
主室	5	 No.6

祭壇の下で寝る人	軒数
家父長	8
家父長以外	1

図4 祭壇の場所と祭壇の下で寝る人

②柱の設置場所

祭壇と同様、何らかの意味を持つ柱は就寝場所に取り付けられていることが多く、また、その柱の下で寝る人は家父長である傾向がみられた。(図5)残りの家父長以外の人が寝るという2軒に関しては、家父長の長男の場合と家父長の次男の場合であり、ともに男性であった。柱の意味においては、各住居ごとにより異なるが、設置場所に関しては、就寝場所と関係しているといえるであろう。①②で述べたように、祭壇においては、寝室に設置されている事例が多く、また祭壇の下では家父長が寝るなど就寝形態にも関わっていることが判明した。柱においても、祭壇と同様のことが言えた。

柱の場所	軒数	平面事例 (■は柱)
寝室	11	 No.47
主室内の就寝場所	1	 No.63
主室	3	 No.51

柱の下で寝る人	軒数
家父長	10
家父長以外	2

図5 柱の場所と柱の下で寝る人

つまり、住居における柱と祭壇の位置は寝室に関係していると言える。

このようなことから寝室は柱や祭壇と関係しており、いわゆるヒエラルキーが高いといえる。住人以外の人が寝室に入ってはいけないという観念もこうした空間の概念と関わるだろう。

5. まとめ

KL村では、バイクという交通手段がもたらされたことにより、村外との交流ができ、市場に行く機会も増えた。そのことでKL村だけでは自給しきれないものが流入した。テレビや冷蔵庫などがそのうちの一部であろう。1990年以降KL村で電気が通りはじめ、現在では70軒中69軒の住居で電気を使っている。テレビにおいては66軒、冷蔵庫においては53軒の住居で所持している。外部からのこのような物質文化が流入し住まい方にも変化が訪れたといえる。例えば、テレビが住居内にあることで、1日の中でテレビを見るという行為が新たに生まれ、現在では、食卓や娯楽のためにテレビは欠かせないものになったテレビを持つ前と住まい方が変わったと言える。

KL村で元来、どの程度、柱や祭壇をもつ住居が存在していたのかは確認できない。3軒の住居において、両親が死んでから祭壇がなくなったという事例があったものの、祭壇が減ってきていると断言することもできない。しかし、信仰を象徴する柱、祭壇はKL村において2割程度の住居でしか持っておらず、ラオスの慣習としてみられてきたそれらは、現在のKL村全体でみるとあまり重要視されていないと言える。

一方で、「体の方向は棟木と垂直方向である」、「頭の向きは寝室の入り口と反対側に向ける」というように、就寝形態においては、柱や祭壇の有無に関わらず、KL村全軒で共通していた。これは住民が意識せずとも、身体的に身につけているものなのではないかと考えられる。これら、物質に表象された信仰と、身体化された慣習による信仰ともに関連する場が寝室である。

KL村全体でみると、信仰が物質に表象されることは少なくなったが、身体化された慣習はいまだに残っていると考えられる。

6. 参考文献

- 1) ラオス文化研究所「ラオス概説」(株)めこん 2003年
- 2) 桃木至朗ほか『東南アジアを知る事典』平凡社(株)2008年
- 3) 「ラオス中部における農山村住宅の形態と住宅に関する住民意識」SITTHIVAN Somchith 吉田 勝行 河本 順子「学術講演梗概集」E-2,
- 4) 貧困プロファイル 要約 ラオス人民民主共和国 独立行政法人 国際協力機構HP
- 5) ラオス文化研究所『ラオスの開発と国際協力』(株)めこん 2003年

つまり、村外との関係でさまざまなものが変わりつつあるものの、寝室、祭壇、柱に表象される慣習的住まい方は、いまだに残っていると考えられる。

共通するところ⇒寝室であった。

信仰に関する柱と祭壇。⇒寝室に関係があった。

柱ある理由⇒

祭壇ある理由⇒

しんしつは

信仰に関わらないものでも共通

信仰にも関連している

道があり、棟木ができ、寝室の場所がある。

3.3 住居の入り口と寝室の入り口の関係

住居の入り口と 寝室の入り口の関係	軒数	平面事例
垂直	50	
平行	20	

図2 住居の入り口と寝室の入り口の関係

寝室の入り口と住居の入り口の関係を見ていく。2階に寝室がある場合は、階段との関係を見る。70軒中50軒が**垂直の関係**になっていた。残りの20軒は寝室と住居の入り口は平行になっていた。

図1 右か左の理由考えよう

社会変化により、さまざまなもの変わってきている。

各住居によって、住居形式や・・・などは様々である。

しかしながら、住居における寝室の位置や就寝形態は共通している。

寝室ってすごい存在なんじゃないか？

↑↑↑↑↑

その裏付けとして・・・

信仰に注目してみると、

信仰に関連するものである柱、祭壇は寝室と関係があるみたいだ。

信仰も関わっていて、やはり寝室ってすごい。